

「負の記憶」の継承の側面から見た

津波7年後のアチェ——博物館・災害遺産の側面から

寺田 匡宏

私の専門は、災害や戦争など「負の記憶」に関する歴史学・博物館人類学で、これまで研究対象としてきた地域は、日本、北東アジア（中国、韓国）、ヨーロッパ（ドイツ、東欧ほか）である。2004年のスマトラ島沖地震・津波とその被害に関しては、関心をもってきたが、実際に被災地を訪れたのは、今回のシンポジウム・ワークショップがはじめてだった。私は地域研究が専門ではなく、また、インドネシア自体を訪問するのも今回がはじめてであったため、アチェ（インドネシア）の方々、および、インドネシア研究を専門とする日本人の専門家の方々から見ると的はずれで表面的な感想に思われることも多いと思うが、私の目から見た津波から7年目のアチェの状況について、「災害の記憶」の継承という観点を中心に、感じたことを書いてみたい。

◆復興への力強い歩み——全体的な印象

アチェを訪れて感じたのは、悲しみにおおわれた死の町ではなくて、復興へのあゆみを力強くつづけているエネルギーにあふれた町という印象だった。私はアチェ訪問の2ヶ月ほど前の2011年10月に、3.11東日本大震災の津波被災地の仙台、石巻、女川などを訪ねる機会があったが、それらの町は、印象としては、静まり返っていて、まだ喪の作業の途上にあり、今後の復興へのあり方をとまどいながら模索している段階に思われた。それと対比すると、アチェは、もちろん、悲しみや喪は存在すると思われるが、そこから脱して、復興への段階を力強く歩んでいる状況であるように思われた。これは、きっと災害からの年月と関係していると思われる。

エクスカージョンでは津波が来たと言われているエリアをまわることができたが、たとえば、津波が2階まできた市場は活気を取り戻しているように見えたし、中心部の村々は、各国の援助も含めて、家の再建が一通りは完了し、一段落しているように見えた。もちろん、海岸部に行くと、建物が根こそぎ無くなってしまった荒涼とした時間の止まったような風景が広がっていて、津波被害の大きさを7年後の現在もまざまざと感じさせたが、商業や

流通、政治の中心エリアに関する限りは、復興への力強い歩みがとどまることなく着実につづいていることを感じさせた。

この印象は、インフラストラクチャーにかかわることだけではなく、人々の表情からも感じたことである。ワークショップには連日多くの方々が参加して活発な発言をしていた。また、最終日には、TDMRCが主催する地域の小学校などが参加した防災フェスティバルの様子をみることができたが、そこでは、生徒たちや先生たちが津波防災に関する工夫を凝らした展示を行っていた。その子どもたちの明るい表情には復興に向かっての歩みのたしかさを強く感じさせ



国立博物館と同程度の規模をもつ津波博物館

られた。また、同じく最終日のワークショップのムナスリさんの防災に関する講義には多くの小学校の女性の先生が参加していたが、その小学校の先生方がムナスリさんといっしょに津波防災に関する歌を歌う力強い歌声からは、津波の経験を次の世代に確実に伝えていくという強いアチェの人々の決意が感じられ、その歌声にはあれだけの大きな災害にもかかわらず、未来の明るさを信じるアチェの人々の願いが込められているようで強い感動を覚えた。

◆ワークショップの議論から

シンポジウムとワークショップでは連日にわたって活気のある議論が繰り広げられた。正直に言って予想を超える活気と熱気だった。とくに、発表に対する討論が徹底的に行われたのが印象的で、日本でシンポジウムやワークショップが行われる際には、発表に対する討論は時間の制約などによって、ともするとおざりにされることが多いため、今回のシンポジウムとワークショップでの「アチェ流」ともいえる討論の進め方は大変新鮮で、またとても良い方法だと思った。

ワークショップもシンポジウムも日本側とアチェ側の深い信頼関係と相互理解のもとに組織されていたことも印象深かった。シンポジウムとワークショップは、日本語とインドネシア語を使用することを基本として英語の使用は行われなかった。これは、主催者の強い意図によるも

のだったが、その方法は大変成功したと思われる。インドネシア側、日本側のどちらの発表者に対しても、インドネシア語での発表には日本語への翻訳が、日本語での発表にはインドネシア語への翻訳が、ほぼ逐次訳のようにしてその場で行われた。これは、時間がかかるし、はじめは迂遠なようにも思われた。しかし、全日程を終えてみると、少なくとも私に関しては、インドネシア側の参加者の発表に関する理解は格段に深くなったような気がした。ワークショップを通じて知り合ったインドネシア側の参加者の反応を見ても、インドネシア側の人々にとってもそれは同じだったと思われる。

このことは、徹底的な討論とならんで、地域研究がどのようなスタンスで地域社会や地域の人々と向き合うのか、どのようにして地域と相互理解に向かって歩むことができるのかということに対する本ワークショップの解答のひとつだったと思う。もちろん、それが可能になったのは、西芳実さん、亀山恵理子さん、服部美奈さん、浜元聡子さんなど、インドネシア研究の専門家の方々が通訳して下さったからである。細かいニュアンスまで伝える皆様のインドネシア語／日本語のすばらしさとともに、地域研究と言語の関係について大変多くのことを学んだ。

ワークショップの議論の中では、アチェの発表者と日本の発表者の間で、差異が目だったと言うよりも共通する課題があることが多かったことが記憶に残っている。私に関して言うと、私が発表したセッションの「災害遺産、博物館、ツーリズム」では、アチェの方々からは教育プログラムの実践の困難や、防災に関する内容を子どもたちに伝えることのできるメディアーターの重要性、公的な博物館だけでなくさまざまに民間で展開する津波の記憶の継承活動をどのようにつなげていくのか、などの課題が挙げられた。どれも、日本における課題と共通する課題である。それらをどのように解決していくのか、共通する課題が存在することが明らかになったことにより、次に行うべきことが見えてきたというのがワークショップの成果だったと思われる。

◆津波博物館——グローバルとローカル

以下では、博物館と災害遺産について述べたい。津波博物館については事前に、これまでアチェを訪れたことのある何人かの人(日本人)から、展示物はほとんどないという情報を得ていたし、現地で知りあったインドネシアの方が同じことを口にするのもきいたが、実際に訪問してみると、それに反して、きちんと展示が行われていた。

想像するに、この間、徐々に展示物が充実して完成に近づいてきていたものと思われる。事前の情報は、その人がいつ、アチェを訪れたかによって異なっていたと思われる。

津波博物館に関しては3点興味深いことがあった。一つは、その建築の規模の大きさである。津波博物館は、2,500㎡のフロアが4層重なった施設である¹⁾。複雑な形態をしているため1層を単純に4倍すれば延べ床面積になるわけではないが、仮に単純計算すると延べ床面積が10,000㎡近い規模の建築物である。今日のグローバルに展開する戦争や災害に関する博物館の状況では、大規模化が特長のひとつである。たとえば、ベルリン・ユダヤ博物館(2001年開館)15,000㎡、人と防災未来センター(2001年開館)18,700㎡、ワシントン・ホロコーストミュージアム(1993年開館)24,000㎡など、いずれも延べ床面積10,000㎡を越えている。アチェ津波博物館はこれらと匹敵する規模を持つ施設であるといえる。また、インドネシア国内の他の博物館と比較すると、大規模な博物館としてはジャカルタに国立博物館がある。2007年にオープンした同館新館の面積



ベルリン・ユダヤ博物館

のデータを入手することはできなかったが、目視により3000㎡×4層ほどの面積ではないかと思われる。アチェの津波博物館はインドネシア国立博物館とも肩を並べる規模であるといえる。大規模化はグローバルなビジターを意識した結果であると考えられる。アチェを襲った津波は世界各国からの支援や関心を呼び起こした世界的な事件だったが、博物館建築もそれにふさわしくそのことを意識したものとなっていることが興味深かった。

二つ目は、負の記憶に関する建築表現についてである。津波博物館ではメインの展示室に至るまでにいくつかの建築的表現を通過するようになっている。まずビジターは地下の滝の流れる狭い通路を通り、「神の光」のさし込む井戸の底のような空間を経て地上にいたり、「希望の橋」を通してメインの展示室に到達する。単に、展示物だけではなく、それ以外の建築表現の中を通過することによって、いかにビジターに「負の記憶」を身体的に知覚させるかは、近年の「負の記憶」に関する博物館建築での課題である。たとえば、ベルリン・ユダヤ博物館では地下からのアプローチや斜めになった床、ホロコーストタワーと呼ばれる上部からしか光が射し込まない閉塞した空間などを通じて、ビジターにホロコーストという「負の出来事」に身体を通じてアプローチさせる工夫が行われている。津波博物館でも、単に、展示物によって負の出来事を伝えようとするのではなく、現代の負の記憶に関する博物館の課題である、博物館の建築表現そのものを通じて

1) 「Aceh Tsunami Museum」Wikipedia英語版。

ビジターに負の出来事と現在の意味を考えさせるという課題に取り組もうとしていることが興味深かった。

三つ目は展示の内容についてである。展示は10分ほどの津波当時の実写が中心のドキュメンタリービデオからはじまり、アチェの歴史、津波被害の状況のジオラマ、復興の様子、津波のメカニズムと防災に関する展示という大まかなストーリーにそって組み立てられていた。アチェがどのような歴史的文脈のなかにあったかや、津波の被害の概観がよくわかる展示でビジターに津波に関する必要な情報を適切に伝えるものであると思われる。特徴的なのは、ジオラマが多用されていることで、日本やヨーロッパなどの、博物館であまりジオラマを使用しない社会とは対照的である。これは、ビジターの大半であるインドネシアの人々には親しみのある方法であろうと思われる。たとえば、ジャカルタの独立記念塔(MONAS)の展示でもほぼ同じ仕様のジオラマが展示されていて、人々に親しまれている。先ほど、津波博物館はグローバルに展開する博物館の動向の中にあることを意識しているとのべたが、一方で過度にCGやその他の技術を追求することなく、地域の人々に親しみのある方法で展示を行おうとしていることも興味深かった。

◆災害遺産とツーリズム

今回のワークショップのテーマのひとつは災害遺産とツーリズムであった。エクスカージョンでは災害遺産にかかわる場所をいくつか訪問することができた。ただし、災害遺産といっても、どこまでが災害遺産でどこからが災害遺産ではないかの線引きは難しい。なぜなら、遺産は、遺産と認定する人がいて遺産になるものだからである。その意味で、津波によって運ばれた電力船や、津波によって運ばれて家の屋根の上に乗ってしまった漁船の例は興味深かった。山本博之さんがワークショップにおいて、電力船のまわりに、自然発生的に展示場ができたり、市場ができたりという変化が起こっていた

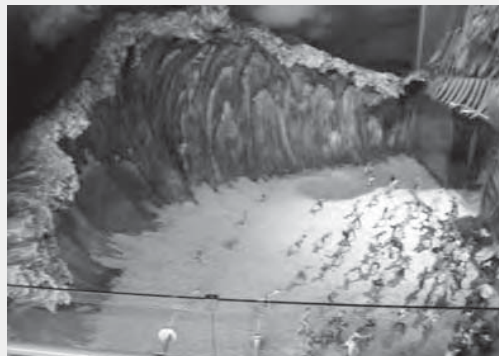
ことを紹介していたので、電力船がある程度、災害遺産として認知されていることは想像されたが、実際に電力船を見に行ってみると、予想を上回る出来事が待っていた。それは、電力船のまわりに塀が作られ、展望台

が建設されていたことである。これはアチェ州による措置とのものであったが、災害遺産が災害遺産としてオーソライズされていく過程が目前で進行しているのを見ることができて興味深かった。

また、津波によって運ばれたものなどの直接の災害遺産ではないが、中国からの支援で作られた復興団地(Kampung Persahabatan Indonesia-Tiongkok 中国-印尼友誼村)も災害遺産とツーリズムを考える上で興味深かった。ここは、アチェ市外から車で東に30分ほどのところの高台にあり、そこからは、アチェの平野やインド洋を一望にすることができる。団地のいちばん上の眺めがいいところには、眺望用のイスが並べられ、あずま屋やキオスクが作られていて自然発生的な観光スポットとなっていて、われわれが訪問したときも幾人かの中国系の観光客が訪れていた。これは、直接的な津波の災害遺産に関するツーリズムではないが、広い意味での津波という出来事から派生したツーリズムとしてとらえることができると思われる。ツーリズムは地域を活性化する側面がある。この村では、ツーリズムを商機ととらえ、積極的

にそれを利用することによって、ある種の活性化がもたらされているように思われた。

おそらく、それ以外にも津波に関係した遺産は多く存在するだろうと思われる。ワークショップの討論の中で、バンダアチェ市観光・文化局のサブティ・メルヴィタさんが民間に存在する博物館やモニュメントの情報を統合する方法やその必要について意見を述べ、また山本博之さんも「モバイル博物館」の提唱を行ったが、様々な形態で存在する津波に関する遺産に関する情報を集約し、それを線や面として結んで、外部から訪問する人に提供する



津波博物館で展示されているジオラマ



独立記念塔で展示されているジオラマ



塀で囲まれた電力船

ことは、個別の場所で行われている個別の地域の活性化が集積することによるシナジー効果がもたらされるのではないかと思われた。

◆遺体の写真をめぐって

それを災害遺産といってよいのかどうか、「負の記憶」の継承という面からどのようにとらえたらよいのか困惑をおぼえたものもあった。それは、遺体の写真である。今回のアチェ訪問では、遺体の写真が直接的に展示されたり、提示されたりするのを2回ほど目にした。1回目は、電力船の横にある公園にあるあずま屋のような建物で展示されていた写真である。私は見なかったのだが、見た人によると、そこには遺体の写真が多く展示されていて、そこで案内役のようにになっている地元の人が、「胎児が見えている」と言って、腐敗した妊婦の遺体の腹部から胎児がむき出しになった写真を説明してくれたという。そこでは、それらの写真をおさめたDVDも販売されていた。2回目は、ワークショップで知り合った学生によって、学生が私に津波の写真を見たいか、と尋ねたので、Yesという、学生が持っているパソコンのフォルダをあけて見せてくれたのが、ほとんどが津波被害にあった遺体の写真であった。

この二つ以外には、津波による遺体の写真は目にしなかったのだが、このことが強く印象に残り、また困惑させられた。第一に、このことに困惑させられたと言う場合、私の側の文化的な問題があると思われる。私が属している日本の現代の文化においては、遺体の直接的な映像表現は強く規制されていて日常的には遺体の写真を見ることがほとんどない。3.11東日本大震災の津波被害に関

しても、新聞やテレビや週刊誌などで遺体の写真が掲載されることはほぼ皆無だった。つまり、死体の写真の展示に関する困惑は、私がそのような文化的な文脈にあるため遺体の写真が公共的に展示されたり、とくに抵抗無しに見せられたりすることに困惑しただけのことだといえるだろう。

しかし、これは、負の記憶を考える上で、避けて通れない問題でもある。負の記憶の元となる負の出来事とは、多くの場合は、大量の死者が発生している。負の記憶というと、死者が発生したことは婉曲的に見えなくなっている

が、負の記憶の継承とは、実際は、死者の記憶をどのように継承するか、死者に対してどのような態度をとるかという文化的な問題だからである。

遺体の写真の表現は、文化により、時代により変容がある。たとえば、日本では1923年の関東大震災後には、多数の遺体の写真が絵はがきとして売られていた。現在、ドイツ国内の強制収容所跡地の施設で大量の遺体の写真を目にすることはあまりないが、ポーランドのアウシュヴィッツ博物館では大量の遺体の写真が隠すことなく展示されている。遺体そのものはもちろんだが、遺体の写真をどのようにあつかうかも、死をどのように扱うかということであり、文化的、社会的、歴史的な文脈に依存している。アチェ社会で死はどのように人々に考えられているのか、今回は、そこまでつこんだ議論をアチェの方々とはすることはできなかった。地域研究とは私の側のもの

の見方を再考し、その地域のものを見方がどのようなものなのかを知ることであろう。その意味で、アチェの方々にとって、遺体の写真が展示されていることはどのような意味があるのか、今後知ることができる機会があればと思った。

◆悲しみのゆくえと地域研究

津波にあった人々は、どのような悲しみや苦しみを持っていたのだろうか、あるいは今も持っているのだろうか、このことも知りたいことのひとつだった。もちろん、人々のほんとうの悲しみや苦しみがわずかな期間訪れた者にわかるはずはない。けれども、多くの人々が悲惨な目にあった場所を訪れるとしたら、その場所でどんな悲しみや苦しみがあったのかを知ることが必要なことではないかという思いがあった。

悲しみにふれたような気がした場所があった。それはひっそりと、だれもいない部屋の中だった。それは、国際赤十字社のプレハブがならんだ中の一棟の中の一室で、そこは過去には日本赤十字社も使った建物だったというが、いまは、会議棟のようになっていて、現在の災害対応の状況をしめすパネルなどがおかれていた。その会議棟の一室に犠牲者から集められたIDカード、水に浸かった紙幣やその他の遺品、エクセルに入力された1万人以上の行方不明者のリストなどが並べられていた。それは、インドネシア赤十字社が津波直後に遺体の収容を行った



中国—印尼友誼村の「展望台」



遺体の写真の展示されていた建物

ときに遺体から回収したモノやデータとのことだった。その部屋は、積極的に「展示する」というよりも、赤十字社が持つことになってしまったそれらのモノをとにかく空き部屋だった一室のその部屋の壁に貼りださずにはいられなかった、というような感じに見えた。それには博物館の展示物のようなキャプションや陳列番号のようなものはなかった。しかし、それは強く見るものに訴えかけた。

ひとつにはそれが、IDカードだったと言うことがあると思われる。IDカードには写真が貼られていた。壁に貼られた何十のIDカードの中からは、死者となってしまった元の持ち主が、こちらをまっすぐに見ていた。そのすべての持ち主が津波によって生命を奪われたのだ

ということが心を揺さぶったのだと思う。また、その部屋の中に充満していた臭いも関係していたかもしれない。その部屋はそれほど大きな部屋ではなかったし、そのモノは壁のケースの中に貼られているとはいえ、ケースは木枠のケースだったから、部屋の中には水に浸かって腐敗したモノの特有の臭いがあった。その部屋の中にいて、人々が身につけていたものを見て、人々が飲み込まれてしまった水の臭いに体をつつまれたとき、津波に出会った人々の苦しみやその人々を失った人々の悲しみが迫ってくるような気がした。

とはいえ、それはあくまで、そこにいた私の想像であって、私の側の主観的な感情だった。そこで私は、津波の被害にあった人々の声を聞いたわけではないし、苦しみにについての語りをきいたわけではない。

では、いったい、アチェの人々はどんな悲しみや苦しみを持っていたのだろうか、いまも持っているのだろうか。正直なところ、今回、私は、その答えを見つけるには至ら

なかったように思う。その答えを見つけるには、短い期間だったし、こちらにもその準備がなかったのだと思う。

しかし、今回、アチェに行ってみて、この「災害対応の地域研究」プロジェクトのメンバーがそれに肉薄しつつあることがわかった。たとえば、西芳実さんがすすめている



おじいちゃんの自宅で原稿を手にする西さん

「タイプライター・プロジェクト」で被災体験を元にした自伝をつづっているおじいちゃんの自宅を訪問する機会があった²⁾。おじいちゃんは、すでに数十枚の手記を書いていた。訪問したとき、おじいちゃんは津波の被害体験について、とくに悲しみについての話を聞かせてくれたわけではなかったし、どちらかというと世間話に終始したように思う。しかし、人が心の中をうち

明けるためには、長い時間をかけて聞き手との信頼関係を築かれることが必要である。西さんとおじいちゃんの間には、その信頼関係が築かれているように思われた。

このような長期にわたる関係は、地域研究、とりわけ人文学の方法による地域研究が、災害という長期的な影響を社会に与える出来事に関与する際のメリットだと思われる。ワークショップの過程を通じて強く感じたのは、初めにも述べたが、長期にわたる調査によりアチェの人々との信頼関係が築かれているということだった。そこでは、インドネシア語をごく当然のように話される地域研究の専門の日本側のメンバーの方々が積み上げられてきたものの大きさを感じさせられた。私は、はじめに書いたとおり、インドネシアの地域研究が専門ではないし、インドネシア語も話せないで、実は、災害対応の地域研究に何ができるかまだわからない。しかし、ワークショップを終えてみて、負の記憶の継承に関心をもっている者の一人として、アチェで人々がどのようにして災害の悲しみや苦しみを語り継いでいくのかについてこれからも関心を持っていて、この研究プロジェクトを通じて、何かできることがないか考えていければと思うようになった。

2) 西芳実 2011 「記憶や歴史を結び直す：2004年スマトラ沖地震津波被災地におけるコミュニティ再生の試み」『季刊 民族学』138, pp.83-88。